



TEJIROOHIGASHI SITE

手白尾東遺跡

1995.3

手白尾東遺跡調査団

山梨県長坂町

手白尾東遺跡

宅地造成工事に伴う発掘調査

序 言

長坂町は、八ヶ岳南麓の広大な台地のほぼ中央に位置し、名水と国蝶オオムラサキの里として自然に恵まれた高原の町です。

こうした自然のもとで、この地には昔から多くの人々が住み生活してきました。特に縄文時代の遺跡が数多く残されている地域として知られています。

このたび、長坂町大井ヶ森地内における株式会社泉郷の宅地造成に伴い、平成6年度に手白尾東遺跡の発掘調査を実施しました。その結果、縄文時代後期の集石遺構などが出土しました。

これまで大井ヶ森地区での調査例が少なく、特に古代史研究上空白であったなかで、今回の調査は、八ヶ岳南麓で豊かな生活をしていた縄文時代の人々の様子を探る大変貴重な資料ではないかと思えます。その意味からも本報告書が有意義に活用されることを希望いたします。

最後に、調査にあたり種々ご指導、ご協力をいただいた関係機関、申請者の泉郷様ならびに直接作業に従事していただいた方々に深く感謝申し上げます。

平成7年3月

手白尾東遺跡調査団

団長 小松 清寿

例 言

1. 本書は、山梨県北巨摩郡長坂町大井ヶ森字手白尾地内に所在する手白尾東遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、株式会社泉郷の宅地造成工事にともない実施した。
3. 発掘調査は株式会社泉郷と長坂町教育委員会とにより、手白尾東遺跡調査団を組織して行われた。

調査団組織

団 長	小松 清寿 (長坂町教育委員会教育長)
副団長	平島 善正 (長坂町教育委員会教育課長)
副団長	琴坂 延洋 (株式会社泉郷甲信支社長)
主任調査員	小宮山 隆 (長坂町教育委員会文化財担当)
調査補助員	渡辺 好樹 (株式会社泉郷甲信支社)
調査補助員	刑部 節夫 (株式会社泉郷甲信支社)
事務局長	輿石 君夫 (長坂町教育委員会教育係長)
事務局員	白介はる美 (長坂町教育委員会職員)
事務局員	平島 長夫 (長坂町教育委員会職員)

4. 本書の編集並びに執筆は、小宮山隆が行った。
5. 本書作成に関わる業務は、吉田光雄・秋山圭子・日向登茂子・石川昭江が行った。
6. 発掘調査、遺物等の整理及び報告書の作成にあたり、以下の方々の御指導助言をいただいた。記して謝意を表する次第である (敬称略)。

小野正文・保坂康夫 (山梨県教育庁学術文化課)、榎原功一 (財団法人山梨文化財研究所)、石井寛 (横浜市埋蔵文化財センター)、金谷秋子 (東海大学)、佐野隆 (明野村教育委員会)

7. 発掘調査、整理によって作成された資料及び出土遺物は長坂町教育委員会において保管している。
8. 発掘調査作業員
秋山圭子、浅川喜恵、植松重雄、滝田武子、平島弘子、堀内さた子、堀内徳一、横山幸男、吉田光雄

Contents

本文

序言	3
例言	5
第1章 発掘調査に至る経緯	8
第2章 遺跡をとりまく自然環境と歴史的環境	9
第3章 遺構の検出状況	14
第4章 まとめ	21

挿図

第1図	基本層序	8
第2図	周辺の縄文時代の遺跡分布図	10
第3図	周辺地形および発掘区	12
第4図	手白尾東遺跡全体図	13
第5図	1号集石図	15
第6図	2号集石図	16
第7図	1号土坑	17
第8図	2号土坑	17
第9図	3・4号土坑	18
第10図	2号集石内出土土器	19
第11図	2号集石内出土土器拓影	19
第12図	1号集石内出土打製石斧	20
第13図	1号集石内出土石匙	20
第14図	2号集石内出土打製石斧	20
第15図	柳坪遺跡礫層平面図	22
第16図	長坂町北部の縄文時代遺跡分布の変遷	23
第17図	夫婦石遺跡の土器拓影	23

写真図版

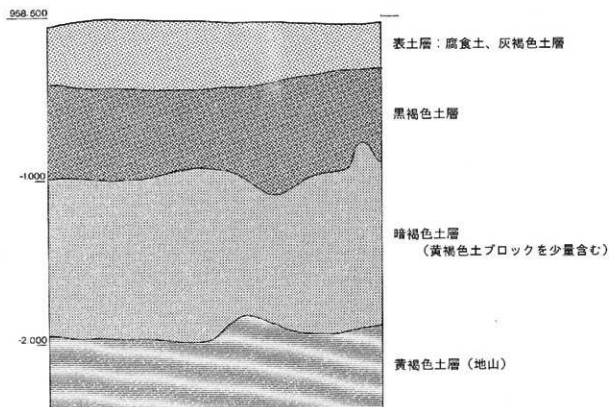
図版1	手白尾東遺跡全景	25
図版2	土坑	25
図版3	出土土器	26
図版4	出土土器片	26
図版5	出土石器	27
図版6	夫婦石遺跡土器片	27

第1章 発掘調査に至る経緯

平成5年12月に株式会社泉郷から、北巨摩郡長坂町大井ヶ森地内の約8,000㎡に、宅地分譲開発の申請があった。当該地域は原生林に覆われ表土からの埋蔵文化財の有無の確認が困難であることと、周知の埋蔵文化財包蔵地である手白尾遺跡が至近距離に位置しているため、長坂町教育委員会では埋蔵文化財の存在する可能性があると判断して、平成6年1月に確認調査を行った。確認調査の結果、土器片や石器が出土したほか、竪穴状の遺構も確認されたため、当該地域に小字名から手白尾東遺跡という名称を与え、埋蔵文化財包蔵地とすると同時に、株式会社泉郷と長坂町教育委員会の二者で協議検討を行い、文化財保護法に基づき宅地分譲開発の事前発掘調査を実施することとなった。

調査にあたっては、株式会社泉郷と長坂町教育委員会の二者により、長坂町教育委員会教育長小松清寿を団長とする手白尾東遺跡調査団を結成し、調査主体とすることを取り決めた。

手白尾東遺跡調査団では、平成6年4月から6月まで発掘調査を実施し、出土遺物や図面の整理等は平成7年3月まで要した。



第1図 基本層序

第2章 遺跡をとりまく自然環境と歴史的環境

手白尾東遺跡は、山梨県北巨摩郡長坂町大井ヶ森字手白尾地内に位置し、八ヶ岳連峰南部権現岳南麓の標高960mに立地する(第2図)。長坂町内でこれまでに知られている遺跡のなかでは、標高の最も高い遺跡の一つになる。この高原地帯は女取湧水や三分の一湧水などで知られるように豊富な湧水が数多く、太古から今日に至るまで山麓の人々の生活に欠かせない資源となっている。手白尾東遺跡の周囲にも、原生林のなかには名もなき湧水が点々とみられ、古柳川や女取川といった八ヶ岳南麓高原を潤す多くの河川の源流となっている。

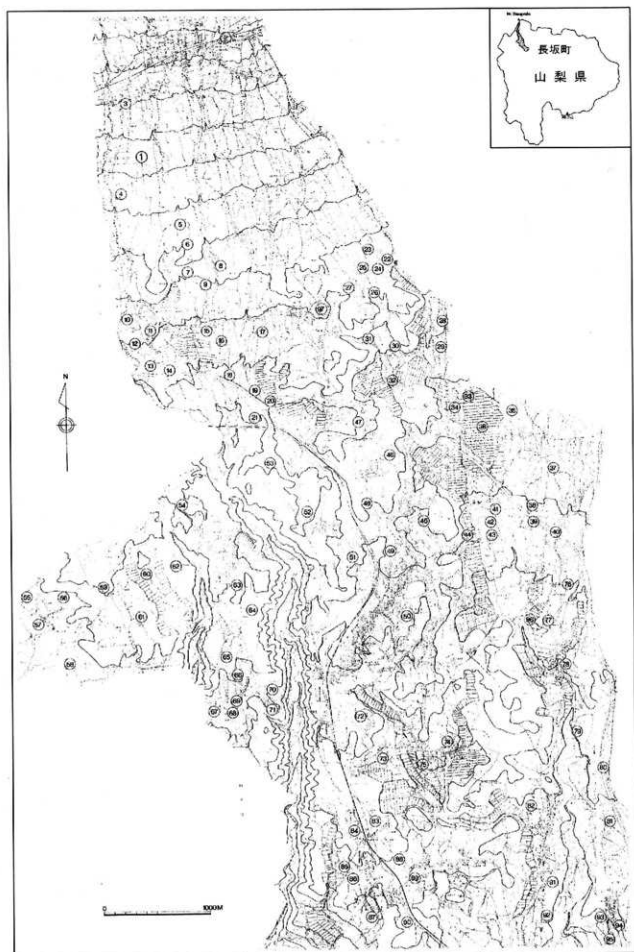
これらの河川は八ヶ岳山麓の標高800m前後を境にして、下方では河川侵食が発達し尾根と谷の地形区分が明確になるのだが、それより上方の手白尾東遺跡が位置する高原地帯では、八ヶ岳火砕流の小門頂丘状の流れ山が点在しているほかは、侵食段階は一般に幼年期であり、微高地と浅谷が連続する地形を呈している。手白尾東遺跡はこれら微高地から湧水のある浅谷にかけての斜面に立地しているため、雨天時には地下水位が上昇し、発掘調査区内においても低位の場所では冠水してしまうこともあった。

水資源に恵まれていると同時に、湿地に接した地形環境のなかに遺跡があることについて、人々のどのような生活行動の所産としてこの手白尾東遺跡が今日に遺されていたのかを検討する際に考えておかなければならない。

手白尾東遺跡の周辺には多くの遺跡がこれまでに確認されている(第3図)。手白尾東遺跡の南方の中込遺跡では、山梨県埋蔵文化財センターの発掘調査によって縄文時代の草創期から後期にかけての遺構・遺物が発見され¹⁾、夫婦石遺跡では縄文時代後期から晩期の遺物が大量に散布しているなど、縄文時代を中心とした遺跡が目立つ(第1表)。手白尾東遺跡周辺のいくつかの祠に、今日でも多数の縄文時代の石棒が奉納されていることも、縄文時代遺跡の密度の高さを示している。とくに、手白尾東遺跡の南方(山麓下方)に位置する流れ山状地形(森山と横山)より下方の地域では、手白尾東遺跡のあたりに比較して尾根と谷の地形が多少明確になるが、水はけのよいほとんどの尾根上には縄文時代の遺跡が存在するといっても過言ではない。縄文時代遺跡が非常に高密度に分布する八ヶ岳山麓のなかで、手白尾東遺跡周辺の地域も遺跡密集地帯として位置づけられる。

しかし、これら地域では近年まで開場整備事業が進められ、その際にいくつかの遺跡が破壊されたことも事実である。それは、開場整備の完了した水田の土手から遺物片が検出されることから裏付けられる。埋蔵文化財に対する社会的な認識が低かった時期のこととはいえ、八ヶ岳南麓の歴史研究にとっては残念なことである。

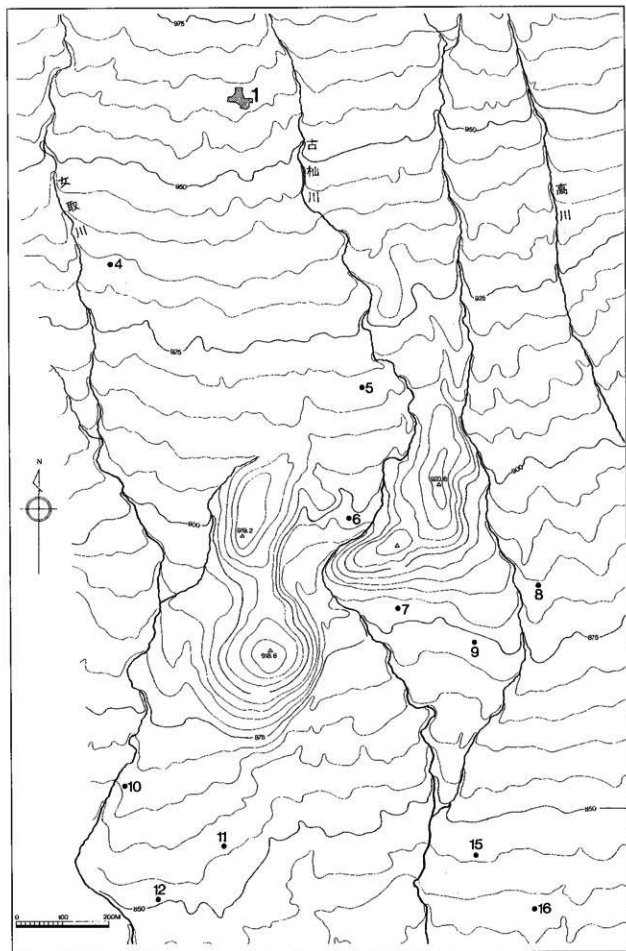
註 ¹⁾ 山梨県埋蔵文化財センター 1990『中込遺跡』



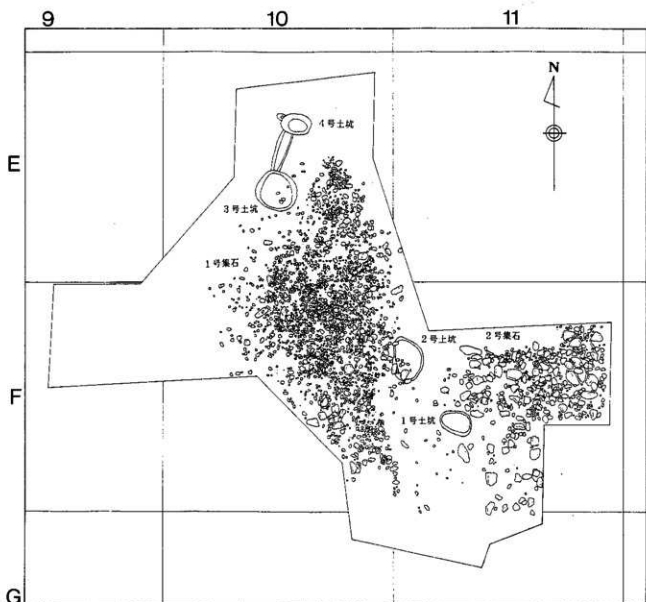
第2図 周辺の縄文時代の遺跡分布図

第1表 周辺の縄文時代の遺跡一覧

1	手白尾東遺跡	51	高松遺跡 (中期～後期、曾利、堀之内)
2	信玄原遺跡 (中期)	52	久保遺跡 (中期、曾利、加曾利E)
3	菅間遺跡 (後期)	53	越中久保遺跡
4	手白尾遺跡 (後期)	54	池の平遺跡 (中期、五領ヶ台、新道、曾利)
5	中込北遺跡 (中期、曾利)	55	後平遺跡 (中期、藤内、井戸尻、曾利)
6	中込遺跡 (草創期～後期)	56	狐平北遺跡 (中期、曾利、称名寺)
7	横山1遺跡 (中期～後期)	57	狐平遺跡 (中期～後期、五領ヶ台)
8	夫婦石遺跡 (後期、堀之内～晩期)	58	大平遺跡 (中期)
9	横山2遺跡 (中期～後期、堀之内)	59	西熊遺跡
10	上フノリ平北遺跡 (中期、井戸尻、曾利)	60	東兼1遺跡 (中期、五領ヶ台、曾利)
11	上フノリ平遺跡 (中期、新道)	61	西熊南遺跡 (中期、狹沢)
12	上フノリ平西遺跡 (中期、藤内、曾利)	62	東兼4遺跡 (前期～後期、桑原文系、曾利、堀之内)
13	上フノリ平南遺跡 (中期、曾利II～V)	63	岡の原遺跡 (中期、五領ヶ台)
14	下フノリ平遺跡 (中期、曾利)	64	健康村遺跡 (前期～後期)
15	横山平遺跡 (中期～後期、曾利II～III、堀之内)	65	和手遺跡 (中期、曾利II～III)
16	葛原北遺跡 (中期)	66	腰巻遺跡 (中期、曾利)
17	東下屋敷遺跡 (中期～晩期、曾利)	67	清吾白樺美術館南遺跡 (中期、井戸尻、曾利)
18	葛原遺跡 (中期、井戸尻、曾利)	68	堀久保遺跡 (中期、曾利)
19	西下屋敷南遺跡 (前期～後期、諸磯C、曾利V、称名寺、堀之内)	69	堀久保遺跡 (中期～後期、五領ヶ台、狹沢、藤内、井戸尻、曾利)
20	新田森遺跡 (中期～後期、曾利V、堀之内)	70	堂久保遺跡 (中期～後期)
21	西下屋敷遺跡	71	城山上遺跡 (中期、狹沢、藤内、曾利)
22	稲屋敷東遺跡 (中期～後期、曾利)	72	酒呑場遺跡 (早期～中期、諸磯c・b、狹沢、曾利)
23	稲屋敷北遺跡 (中期～後期、曾利II、堀之内)	73	長坂上条遺跡 (中期～晩期)
24	靱屋敷遺跡 (中期、藤内、井戸尻、曾利)	74	東村遺跡 (後期)
25	牛久保遺跡 (中期、狹沢、新道、加曾利E、曾利)	75	小反遺跡 (中期、加曾利E)
26	牛久保南遺跡 (中期、曾利)	76	石原田遺跡 (後期、堀之内)
27	沢入遺跡 (中期)	77	石原田南遺跡 (中期、曾利)
28	神之原遺跡 (中期、曾利III)	78	上ノ屋敷遺跡 (中期、加曾利E)
29	屋敷附遺跡 (中期、曾利)	79	柳舟遺跡 (中期、曾利)
30	十郎林遺跡 (中期、狹沢、藤内)	80	二本木遺跡 (中期)
31	横手遺跡 (後期)	81	東前田遺跡
32	中尾根遺跡 (後期、称名寺)	82	大久保遺跡 (中期～後期、曾利)
33	別当遺跡	83	反田遺跡
34	別当西遺跡 (後期、堀之内、加曾利B)	84	池平沼和堤北遺跡 (中期、曾利)
35	南新井北遺跡 (後期)	85	池平遺跡A (中期、藤内)
36	小和田遺跡 (中期～後期、狹沢、新道、堀之内)	86	池平遺跡B (中期、五領ヶ台、踊堀、狹沢)
37	窪田遺跡 (中期)	87	上日野遺跡 (中期、曾利)
38	柳新居遺跡 (中期、新道、曾利)	88	北村遺跡 (中期)
39	柳坪A遺跡 (中期、藤内、井戸尻、曾利)	89	新居遺跡 (中期、井戸尻)
40	柳坪B遺跡 (中期、曾利II～III)	90	上口野A遺跡 (中期)
41	中之台遺跡 (中期、曾利)	91	原町南遺跡 (中期、藤内)
42	柳坪北遺跡 (中期、曾利)	92	山本遺跡 (中期～後期、藤内、堀之内)
43	秋田小学校周辺遺跡 (中期、曾利)	93	前村遺跡
44	久保地遺跡 (中期)	94	前村1遺跡
45	成岡遺跡 (中期、曾利)	95	勝見遺跡 (中期)
46	米山東遺跡 (中期)	96	塚原遺跡
47	米山遺跡 (後期)	97	菅沼遺跡 (後期)
48	房屋敷遺跡 (前期～中期、諸磯、曾利)		
49	大林遺跡 (中期～晩期、曾利、加曾利E、堀之内、加曾利B)		
50	上町遺跡 (中期、加曾利E)		



第3図 周辺地形および発掘区（トーン部分）



第4図 手白尾東遺跡全体図

第3章 遺構の検出状況

手白尾東遺跡は原生林に覆われていたため、発掘調査区では樹根が地下に張りめぐっていることと、周囲河川の侵食が未発達なために十石流の痕跡とみられる転礫が調査区内にも多数存在するなどの理由から、遺跡の保存状況が悪く、文化層はかなりの擾乱を被りながら今日に至っている。基本層序を第1図に示したが、調査区内において場所ごとに各層の厚さは多分に異なっている。遺構あるいは遺物の確認できる層は表上下の黒褐色土層と暗褐色上層である。また、各層とも礫を含んでいるが、とくに暗褐色土層および黄褐色土層に比較的礫が集中して混入している。

このような状況下ではあるが、調査区中心付近に礫が高密度に集中している地点2ヶ所と土坑と思われる堅穴状の掘り込みが4ヶ所それぞれ確認され、これらにともなって縄文時代後期の土器片や石器が出土した。

礫の集中地点については、人為によるものか自然作用のものか判別が困難であるが、2ヶ所それぞれの地点で礫の大きさが比較的均一であること、これら礫集中地点の周辺から遺物が出土したことなどから、多少なりとも人々の手に加えられたものと判断し、集石遺構として報告しておく。

1号集石（第5図）

調査区中央付近に拳大から径1メートルを超えるようなまでの大きさの礫がまとまって出土し、1号集石とした。拳大ほどの礫の密集のなかに径数十センチメートルあまりの比較的大型の礫が不規則な列を成しているが、これが何らかの構造物の痕跡であるのか、調査の限りでは明らかにできなかった。

集石の北西側で礫の分布密度が低下するあたりから、打製石斧と大形粗製の石匙が1点ずつ、および縄文時代の土器片が数点出土した（第12・13図）。これらの土器は、縄文時代後期前葉に位置づけられる。

1号集石の時期決定は、遺物の出土状況が散在的なので難しいが、敢えて記すとすれば、出土した土器から縄文時代後期前葉と推測される。

2号集石（第6図）

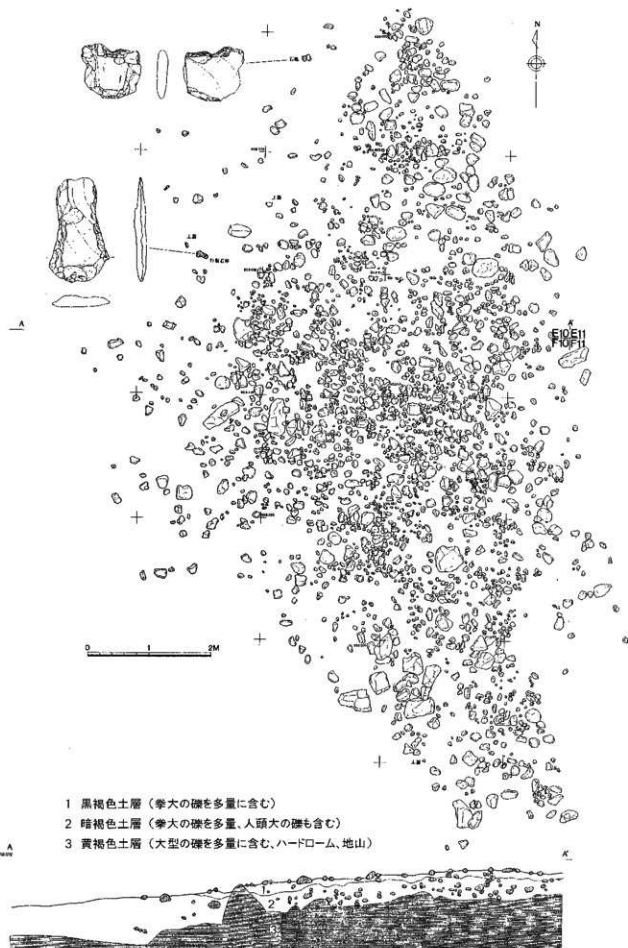
1号集石の南東側に、1号集石の礫に比較してやや大形（人頭大）の礫が列状に配置されている部分を2号集石とした。礫は調査区の東側にさらに広がっているようだが、東側の位置ほど礫の大きさの均一性が低くなるとともに、遺物の出土量も少なくなる。

遺物は打製石斧1点と縄文時代の土器片数点が出土した（第10・11・14図）。これらの縄文土器片は1号集石と同様に縄文時代後期前葉のものと考えられる。

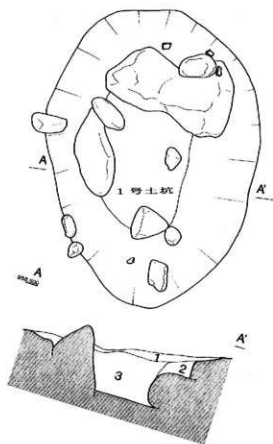
2号集石についても時期決定は非常に困難であるが、出土した土器から縄文時代後期前葉と推測しておく。

土坑（第7～9図）

土坑は4基確認されたが、いずれについても土坑内部からの出土遺物は無く、時代・性格等はわからない。3号土坑と4号土坑との間には幅50～100cmの溝状の掘り込みがある。



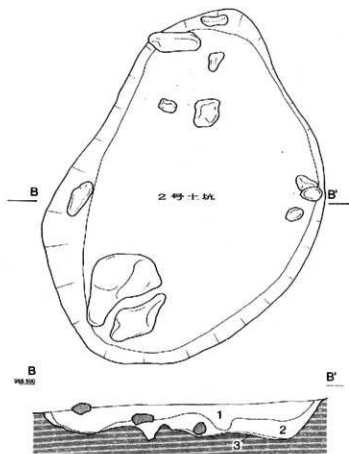
第5図 1号集石図



- 1 黒褐色土層（ローム粒子少量、粒子不緊密）
- 2 黒褐色土層（ロームブロック少量含む、粒子は疏く不緊密）
- 3 暗褐色土層（やや黒い黄褐色土、粒子不緊密）

0 1M

第7図 1号土坑

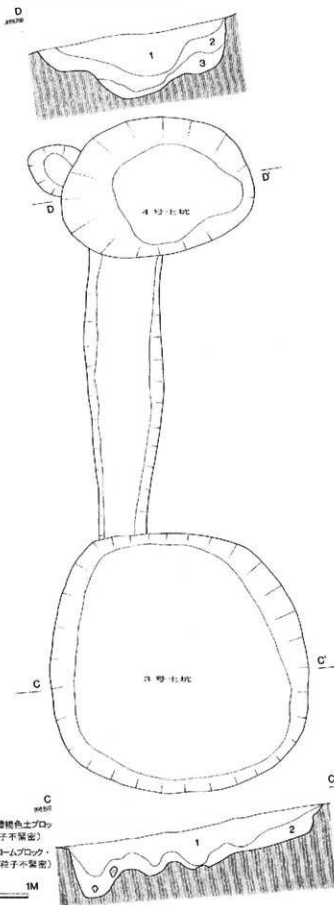


- 1 暗褐色土層（黒色土ブロックを含む、粒子不緊密）
- 2 黄暗褐色土層（ロームブロックを含む、人糞程度の糞を含み、粒子不緊密）

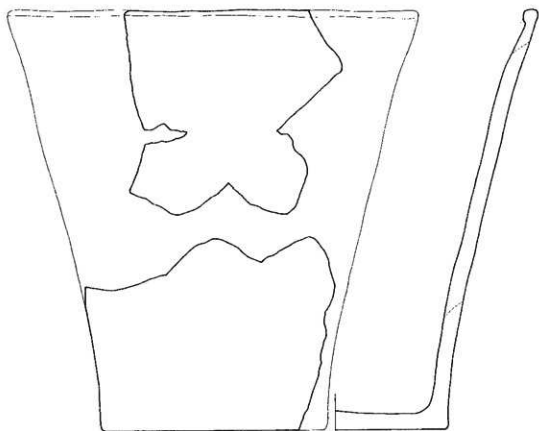
0 1M

第8図 2号土坑

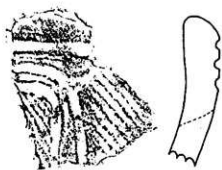
- 1 黒色土層 (暗褐色土を少量含む、粒子不緊密)
- 2 暗褐色土層 (ロームブロック、小礫を含む、粒子不緊密)
- 3 黄褐色土層 (ロームブロックを多量に含む、粒子不緊密)



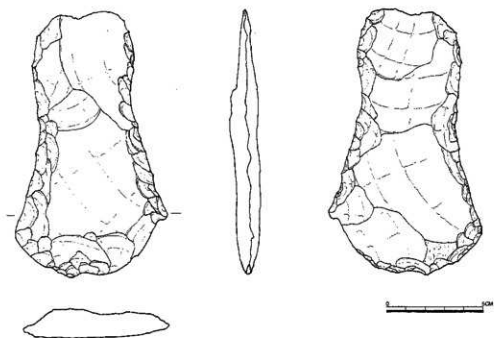
第9図 3・4号土坑



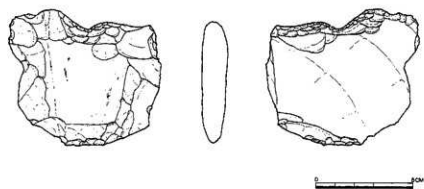
第10图 2号集石内出土土器



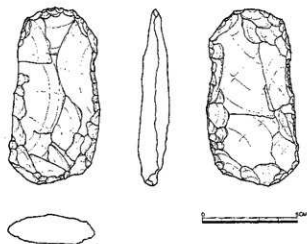
第11图 2号集石内出土土器拓影



第12图 1号集石内出土打製石斧



第13图 1号集石内出土石匙



第14图 2号集石内出土打製石斧

第4章 まとめ

調査のまとめ

手白尾東遺跡の調査では、遺構として報告したものが集石遺構2基と土坑4基にとどまった。いずれの遺構も、確実に人為的な所産であるという充分な根拠が揃っているだけでなく、ましてやその機能や用途について言及するだけの資料は発掘調査から得ることはできなかった。

しかし、出土した遺物はいずれをみても破損は少なく、縄文時代後期の土器片もそれぞれ比較的接合する(図版3)ことを考えあわせると、これら遺物が山麓高位面からの流れ込みとは考えにくい。遺跡地とその周辺は、人々の何らかの生活痕跡として把握するべきであろう。

報告した2基の集石のように、不定形でただ自然礫が集合しているようなケースは縄文時代の他の遺跡においてもしばしば見受けられる。手白尾東遺跡の位置する八ヶ岳南麓においては、同じく長坂町の柳坪遺跡¹⁾で検出された「4区礫層」と報告されているものや(第15図)、大泉村の姥神遺跡の集石遺構²⁾、明野村の屋敷浜遺跡³⁾集石遺構、あるいは長野県佐久地方の浦谷B遺跡⁴⁾遺物集中地点など、縄文時代中期終末～後晩期にかけてのものが列挙されよう。

これらは、縄文時代の早期や前期に見受けられる円形にまとまりのある集石遺構⁵⁾に比較すると、不定形でまとまりがないだけにとどまらず、集石遺構の空間的な範囲設定すら困難なケースもあるという特徴が挙げられる。礫をとまうファイアービットや石椁状配石のようにある程度その機能が推測される集石遺構とは別の視点でもって、これら不定形な集石遺構の解明に努めていく必要性も痛感する。

手白尾東遺跡の位置づけ

手白尾東遺跡は長坂町北部、八ヶ岳南麓高原に位置しているが、この一帯は近年になって開発件数が急増し、いくつかの遺跡が調査されはじめている。最後に、本遺跡の調査結果を踏まえ、長坂町で標高が高い地域(標高800m以上)である長坂町北部の八ヶ岳南麓高原地域について、縄文時代の遺跡分布を若干検討しておきたい。

長坂町北部の遺跡分布は、過去数回にわたり行われた分布調査によって大まかに把握されている。遺跡立地の上限は標高1000m前後がひとつの日安となり(第2図)、それより標高の高い地域では原生林が覆っているために、分布の実体はよくわからない。遺跡が目立ってくるのは標高900m以下の地域である。そのほとんどが縄文時代中期から後期にかけての遺跡である。第16図に分布を示した。

表探遺物からの時期推定に頼らざるを得ない遺跡がほとんどなので、確実な状況は今後の研究を待たねばならないが、それでも着目しておきたい点がいくつかある。それは、有名な井戸尻遺跡など多くの縄文時代遺跡が密集している八ヶ岳でも長野県諏訪地方側の西南麓においては、中期の遺跡が他時期のものを圧倒している状況に比較すると、八ヶ岳南麓の長坂町北部では後期前葉の遺跡が多いことである。また、

西南麓に比較して、長坂町北部では中期の大規模遺跡がほとんどなく、中期の大量の遺物が表探できる遺跡は標高700m台以下に集中している。この一帯で最も多量の遺物が表探でき、規模も最大級であろう夫婦石遺跡の時期は中期ではなく、おおよそ後期から晩期初頭と考えられる(第17図)。とくに、長坂町北部に関しては中期前～後葉に比較して後期前葉の遺跡の方が、より標高の高い地域に立地する傾向が伺える。

長坂町城においても縄文時代中期の大規模遺跡は数多くあるが、これら遺跡が主体的に営まれた場所とは垂直分布で異なる地理範囲に、後期前葉の人々が生活を営んだとも考えられる。標高700m台以下の地域にも分布する後期の遺跡もあわせて検討することが必要だが、ここでは後期前葉における遺跡分布の拡大現象が推測され、手白尾東遺跡もこの現象のなかに包括できる遺跡立地ではなかろうか。資料的に不備な点が多いのでこのような問題に関しては、さらなる資料蓄積と近隣地域との比較検討が必要であろう。



註

- ¹¹ 山梨県埋蔵文化財センター 1986
『柳坪遺跡』
- ¹² 大泉村教育委員会 1987 『姥神遺跡』
- ¹³ 明野村教育委員会 1993 『屋敷添』
- ¹⁴ 望月町教育委員会 1984
『竹之城原遺跡 浄永坊遺跡
浦谷B遺跡』
- ¹⁵ 山梨県考古学協会 1990
『シンボジウム
縄文時代屋外配石の変遷
—地域的特色とその画期—』

第15図 柳坪遺跡4区礫層平面図(註¹¹より)



a 中期前葉（9遺跡）

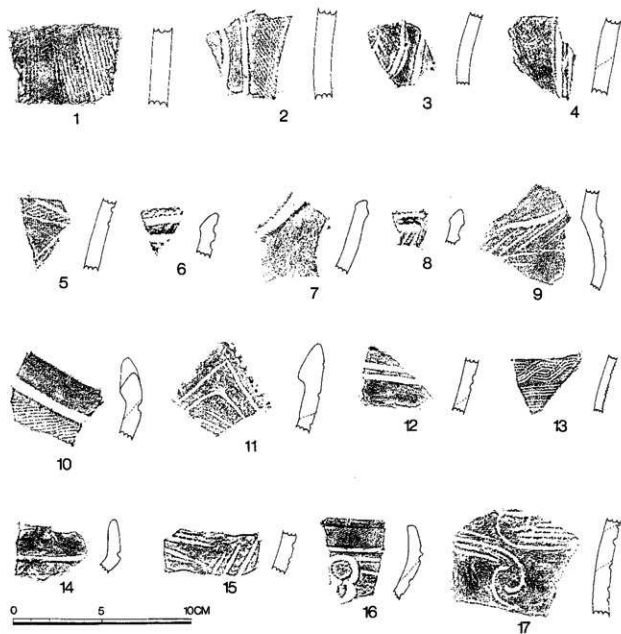


b 中期後葉（16遺跡）



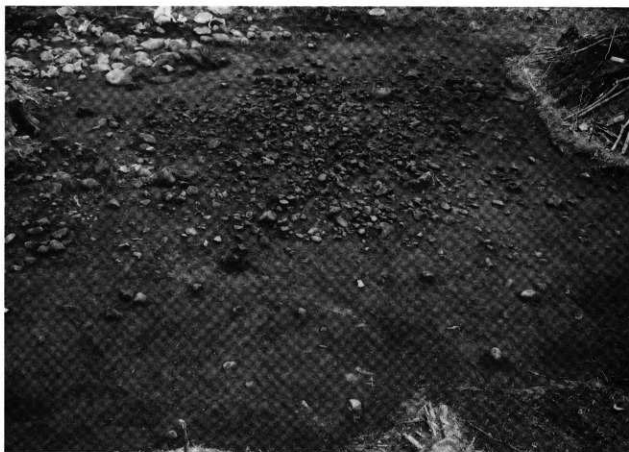
c 後期前葉（18遺跡）

第16図 長坂町北部の縄文時代遺跡分布の変遷



第17図 夫婦石遺跡の土器拓影

写真図版



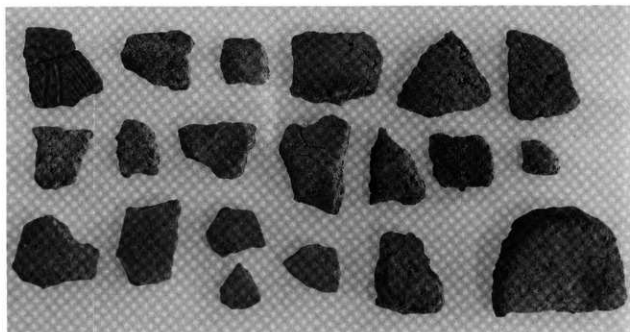
図版1 手白尾東遺跡全景



図版2 土坑(1号)

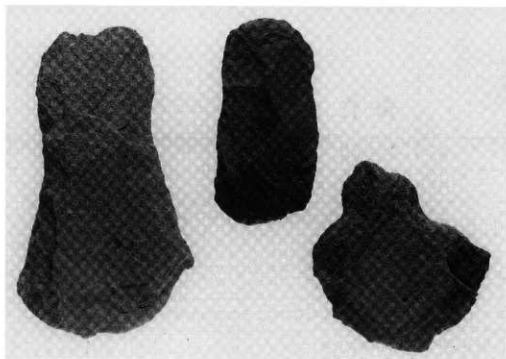


图版3 出土土器

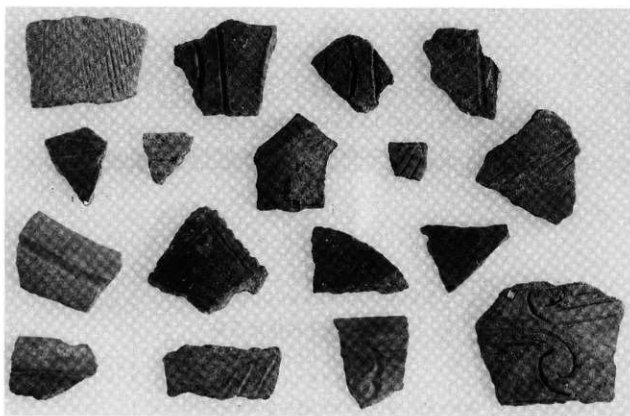


图版4 出土土器片





圖版 5 出土石器



圖版 6 夫婦石遺跡土器片



報告書概要

書名	手白尾東遺跡		
副題	宅地造成工事に伴う発掘調査		
シリーズ	長坂町埋蔵文化財発掘調査報告書 第7集		
著者名	小宮山 隆		
編集・発行者	手白尾東遺跡調査団		
住所・電話	山梨県北巨摩郡長坂町長坂上条2575 19 電0551 32 2111		
印刷所	峡北印刷株式会社		
印刷日・発行日	1995年3月20日印刷 1995年3月31日発行		
手白尾東遺跡	25000分の1地図名・位置	小淵 沢	北緯 35° 52' 09" 東経 138° 21' 12"
概	主な時代	縄文時代後期	
	主な遺構	縄文時代後期の集石2基・土壇4基	
	調査期間	1994年4月1日～6月30日	
要	所在地	山梨県北巨摩郡長坂町大井ヶ森字手白尾	

長坂町埋蔵文化財発掘調査報告書 第7集

山梨県長坂町 手白尾東遺跡

1995年3月20日 印刷

1995年3月31日 発行

編集・発行 手白尾東遺跡調査団(長坂町教育委員会内)

山梨県北巨摩郡長坂町長坂上条2575-19

電0551-32-2111

印刷 峡北印刷株式会社

